

研 究 者：松原ちあき

(所属：東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野)

研究題目：子ども食堂利用児童における口腔環境の実態調査と歯科介入ニーズの検証

目 的：

現代社会では、都市化や核家族化の拡大により子育てや子どもの成長に必要な社会関係の構築は困難な状況を示す。その中で食事は重要なコミュニケーションの機会であるとされ、共食の時間が多いことは、食事の摂取量や精神状態の安定など心身の健康への効果が期待されている。しかし、家族構成や就労状況の多様化などの生活様式の変化により、欠食や家族との共食の機会も減少し、1人で食べる孤食が増加している。そのため、小児期における心身の健康のための食育や食行動に関する支援は非常に重要な課題になってくると考えられる。歯科においては、小児のう蝕罹患率は減少しており、その病態自体も軽症化している。一方で、食習慣の変化や軟食化により、咀嚼機能の減退から口腔の発達不全や歯列不正に影響を及ぼすとされる。2018年には「口腔機能発達不全症」の病名がつき、口腔機能の指導の必要性が示された。一般家庭において食事に関する不安や心配ごとが乳幼児期において60%をこえており、小児の口腔機能を含む介入は食育の場において非常に重要な役割を担う。

近年、民間主体の社会資源の一つとして無料または安価で栄養のある食事を提供する子ども食堂が広まっており、地域子ども達や保護者などに共食の機会を提供する取組が増加している。子ども食堂は、子どもの貧困対策や居場所作りの他に、保護者や地域住民の食生活や生活全般の改善への効果も期待されているが、その実態に関する研究は散見される程度である。さらに食育での重要な役割を示す歯科保健に関する子ども食堂での報告は今までにない。そこで、本研究は子ども食堂実施主体を対象に、口腔保健に関する困りごとや意識等について調査を行い、歯科医療従事者による歯科介入ニーズの有無について明らかにすることを目的として実施する。

対象および方法：

調査は郵送調査および追加のヒアリング調査にて実施した。郵送調査は、沖縄市社会福祉協議会およびボランティア従事者へのアンケート協力依頼により、回答協力の得られた51件の食事を提供する居場所（子ども食堂）を対象に実施した。自記式質問調査票の回答は、子ども食堂を運営する代表者へ記載を依頼した。配布および回収期間は2022年1月～2月とし、調査項目は、子ども食堂の概要（設立年、開設主体、勤務職員状況、利用児童数等）、活動内容（居場所の活用目的、食事提供の状況について等）および口腔保健に関すること（歯科への関心、利用児童の歯・口腔に関する困りごと等）について調査した。また歯科保健に関する事業の実施経験のある子ども食堂を対象に事業内容に関する追加のヒアリング調査を行い、子ども食堂の歯科保健活動に関する実態を調査した。調査内容は、運営概要、実施された歯科に関する事業の内容等とした。

結果および考察：

郵送調査の回収状況は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により活動を休止している子ども食堂が1件あり、有効発送数は50件であった。そのうち回収された有効回答数は24件（有効発送数の48.0%）であった。調査票回答者の平均年齢は、 57.4 ± 12.9 歳であった。子ども食堂を開設してからアンケート回答時までの年数は平均3.9年であった。運営の主体は、個人で実施している子ども食堂が45.8%（11件）と一番多く、次いで法人が29.2%（7件）であった。運営状況は、常勤もしくは非常勤の職員が勤務している子ども食堂が54.2%（13件）、そのほか41.7%（10件）は、ボランティアのみの運営であった。勤務する職員の有資格について様々であり、保育士が勤務する割合41.7%（10件）が多く、そのほかにヘルパー、社会福祉士、教員資格などを有するものが勤務していた。子ども食堂を利用する児童の受入状況は、就学前から受け入れる子ども食堂が62.5%（15件）、小学生を79.2%（19件）、中学生を62.5%（15件）、高校生を45.8%（11件）の子ども食堂で受け入れていた。その他、対象年齢の基準を設けず、大学生や母子家庭世帯全体への支援をしている子ども食堂もあげられた。また運営自体の目的は、「食事提供」と回答した子ども食堂が100%（24件）であり、そのほかに、「居場所」としての提供と回答した子ども食堂が62.5%（15件）、「遊びの場」が58.3%（14件）、「学習支援」が54.2%（13件）、整容等の生活全般の支援として「生活支援」と回答したものが50.0%（12件）であった。また、運営の際に最も重要視している点については、「居場所にいることの楽しさ」が41.7%（10件）と一番多く、次いで「食事・栄養」が25.0%（6件）であった。

食事の提供方法は、COVID-19感染拡大前は「会食型」での提供が83.3%（20件）であり、その他は会食と配食のサービスを複合していることや持ち帰りによる提供があげられた。一方、COVID-19感染拡大後は、「会食型」での提供を行っている子ども食堂が20.8%（5件）であり、配食型や会食と配食を複合していることが、45.8%（11件）であった。

口腔の健康に関する事項については、利用する児童への歯・口腔について関心について、「すごく関心がある」が17.4%（4件）、「関心がある」が58.3%（14件）、「どちらでもない」が12.5%（3件）、「あまり関心がない」が8.3%（2件）、「関心がない」が0.0%（0件）であった。また、これまでに利用児童から歯や口腔に関する訴えを経験があるのは8.3%（2件）のみであり、内容は「歯の痛み」「虫歯」「歯の生え変わりによる脱落」「歯医者に行きたくない」であった。また運営時間内に歯磨きに関する指導や声かけを実施すると回答したのは、45.8%（11件）であった。しかし実際に食後の歯磨きの実施に取り組んでいるのは8.3%（2件）であった。

一方で、食べ方に関する指導を行うものは66.7%（16件）であり、食前食後の挨拶やながら食べなどの「食事のマナー」に関することが54.2%（13件）と最も多く、次いで「好き嫌い」が50.0%（12件）、「よく噛んで食べるように」が45.8%（11件）であった。間食の提供については、70.8%（17件）が実施しており、その提供時間に制限を設けている場所は、20.8%（5件）であった。

今後、取り組んでいきたい事柄として「食後の歯磨き」については45.8%（11件）であり、実施できない理由としては「施設・設備が整っていない」「コロナ禍において居場所での歯磨きは困難」などがあげられた。その他に「栄養に関する指導」については、70.8%（17件）が今後取り組みたいと回答した。また、「今後の子ども食堂での歯科保健との関わりについての希望」

に関する自由記載内容を表1に示す。さらに過去に子ども食堂内で「歯・口腔に関する事業」に取り組んだ経験に関して、12.5%（3件）があると回答した。その内容は歯ブラシの提供等であったが、そのうち追加でヒアリング調査可能と回答した1件でその取り組みについて事例を収集した。その結果については図1に示す。

本研究は子ども食堂実施主体を対象に、口腔保健に関する困りごとや意識等について調査を行い、歯科医療従事者による歯科介入ニーズの有無について明らかにすることを目的とした。実際に利用児童の中で歯や口腔に関する問題を訴えるものがいた経験をしたと回答したものは少なかった。しかし利用児童の歯や口腔への関心があると7割以上が回答し、今後取り組みたい事項として、4割以上が「食後の歯磨き」とあげていた。また、自由回答では歯科医療従事者との連携を希望する回答が多かった。口腔に関する問題を子ども食堂で訴える児童は少ないのが現状であるが、運営側の口腔の健康に関する意識や必要性は高いと判断されていることが示唆された。一方で、「食べ方」に関する指導を実施している場所は6割以上であり、咀嚼や好き嫌いといった口腔機能や栄養に関する指導が実施を実施しているとの回答が多かった。事例からもあげられるように、単に「歯磨き」などの口腔衛生状態に関する介入だけでなく、食事提供や生活支援の場である子ども食堂においては、家庭環境などの社会的背景も考慮しながら、咀嚼といった口腔機能からの支援が歯科保健指導等を実践する際には必要となる可能性が考えられた。さらに、COVID-19感染による課題として食事提供の形の変化もみられ、歯科保健に関わる活動を実践する際もオンラインの使用など新たな課題を検討する必要性があげられた。

表1 今後の子ども食堂での歯科保健との関わりについての希望（自由記載）

コロナ禍において居場所での歯磨きは、感染防止の観点から困難なので、歯磨き以外の学び（虫歯・歯周病・歯並び・インプラント・入れ歯）などの費用面。食事・キシリトールガム・マウスウォッシュなどの予防面を教えていただけると嬉しいです。
今は集まることができないので、なかなかゆっくり話をする機会もありますが、集まれるような時期になったらみんなで一緒に歯の大切さを話をする機会を持ちたいと思っています。
近所の歯科医とも友だちになって講演会など保護者の意識改革、子どもへのアプローチはしたい。
歯磨き指導など
夏休みは週3回開所しているので、歯・口腔のしくみ・健康など子どもと一緒に学び、考える機会が持てたら。
近くの歯科衛生士等の指導があればいいなと思っているが、具体的にアプローチしていない。
歯科衛生士が来ていただいて居場所の親子さんに栄養指導・歯磨き指導をされるととても有難いと思います。
子どもの居場所の目的によっては必要。
歯みがきについては習慣がなかったり、食べ方を教えられていない？家庭の子どもたちもいるので、定期的に専門の方などスタッフ以外の人が教えてくれると助かります。毎日感覚で楽しみながらだと子どもたちも喜びます。
指導を受けたいと思います。
コロナ感染が心配で、歯医者者の通院を保留している家庭もあるため、健全な口腔状態がコロナ予防につながる事を伝えていきたい。

1) 子ども食堂の概要

- ・沖縄県沖縄市 A 子ども食堂（常勤職員 3 名（保育士、社会福祉士を含む））
- ・開設：2015 年運営時間：12～20 時運営日数：週 5 回利用児童：小学生～高校生

2) 事業内容

- ・2021 年 7 月に夏休みに伴う、イベントとして、ボランティアや物資支援等で以前より関わりのあった歯科衛生士により企画された。テーマは「歯の健口縁日」であり、歯の健康記録会（咀嚼チェックガム、歯・舌の衛生状態、歯の数、握力など）と縁日（ヨーヨーすくい、お祭りくじなど）の実施が行われた。記録会の結果の一部ではう蝕が多く、プラークの付着が中等度以上のものが多くいた。咀嚼チェックガムは平均 3.4 点であった。（年齢により歯の萌出状況による影響が考えられるが「よく噛んで食べる」などの指導の一環となる。）
- ・期間は 3 日間。23 名（平均年齢 12 歳、男：女=9：11）の児童が参加した。
- ・児童の感想は「楽しかった」「よく噛むようにする」等の意見があった。また、職員からは、「口腔内を見ることに抵抗はある子もガムを噛むなど楽しく参加することができたと思う」「食事と口との関係について気づいた」等の意見があった。
- ・利用児童の中には、経済的問題や家庭環境により、夏休みを家庭で過ごすことが困難なものいる。そのため、夏休み期間は食事の提供だけでなく、より「居場所」としての活用の重要性が高まる。COVID-19 感染拡大のため、夏休みの行事として海水浴やプールの営業の休止やお祭りといったイベントの中止があった。そのため、今回のイベントにより社会的な側面と歯・口腔の健康への効果があったと感じた。



（左：咀嚼チェックガムによる測定や歯ブラシ・吹き戻しの配布、右：縁日イベントの様子）

図 1 歯・口腔に関する事業に関する事例（1 件）

成果発表：（予定を含めて口頭発表、学術雑誌など）

各関連学会にて発表予定。